

「心の花」新・百人一首(二)

* 「心の花」創刊一〇〇年記念号以来の「新・百人一首」である。

* 百人の選出に当たっては、黒岩剛仁、田中拓也、清水あかね、佐佐木定綱の四名で検討し、佐佐木幸綱先生のご意見を伺いつつ決定した。その責は黒岩にある。

* 各歌人の選歌・コメントは、黒岩、田中、清水、定綱に加え、青山仁、梅原ひろみ、加古陽、河野千絵、服部崇、原才、御手洗靖大の十一名がそれぞれ担当した。

51 いつ来てもライオンバスに乗りたがるライオンバスがそんなに好きか 小紋潤 (昭和三二〜平成三〇)

雁書館編集者。「心の花」編集委員。『蜜の大地』(平成二八年)の一首。幼子へのやさしいまなざしに満ちている。「いつ来ても」で繰り返されている行為が表され、「ライオンバス」のリフレインがそれに呼応している。子の不在が歌われる連作の中にあり、この歌の根底にもいない幼子への思いがうかがえる。(佐佐木定)

52 風落ちて鳶啼く声が呼び戻すデラシネのごとき吾の歲月 桐谷文子 (昭和三二)

甲府盆地の風がやんだとき鳶が鳴く声が聞こえてくる。そのとき、これまでの人生をふと思い出し、感傷的な気分をひたる。デラシネ (Déraciné) は「根無し草」「故郷を喪失した人」を意味するフランス語。自然とフランス語の取り合わせの妙。作者のいつもの洒落た雰囲気がこの歌に醸し出されている。ワインを味わいたくなる。甲府なぎの会の代表を務める作者が「心の花」創刊一〇〇年記念号の自選三首に選んだ一首。(服部)